

ベルクソン研究 『物質と記憶』における一元化の方途

Bergson on the ways of unification in “Matter and Memory”

後藤 秀文

序

ベルクソンは『物質と記憶』において、当時の心理学的・脳生理学的研究を手がかりに、物質と表象の中間的存在としての「イメージ (image)」という概念を用いて心身二元論という問題に取り組んだ。ベルクソンは、実在を持続の流動とする立場に立ち、心(記憶)と身体(物質)を持続の緊張と弛緩の両極に位置するものとして捉え、その双方が持続の律動を通じて相関することを立証しようとしている。

興味深いのは心身の関わり合いを証明していく方法だ。「身体」を物理的事実の中だけで論じてしまえば、当初から二元論を想定してしまうことになり心と身体の関わり合いの考察を困難にしてしまう。また、「精神」を観念の中だけで論じることも、同様の理由から困難の種となってしまふ。ベルクソンはこの困難を避けるため、物質については生理学的事実や心理学的研究の中で「知覚」を考察することによって精神との接触を試み、また精神については観念ではなく「イメージ」という概念(記憶イメージ)から物質への着地点を見いだそうとした。これは同時に、二元論的な論じられ方がもつ本質的な誤謬を徹底的に洗い直していく考察でもある。

本稿はベルクソンが採用した考察の方式を主題化することを目指し、『物質と記憶』での心身問題に代表される一元論の方途を見届けようとするものである。

第一章 二元論における「知覚」と、「純粹知覚」

1 伝統的二元論の思弁性

近代的意識において知覚について考える場合、私たちは主体と客体を想定することに慣れている。そして知覚の成立をめぐる考察では、主体・客体のどちらを主役にするかによって二通りの考え方のいずれかを採用している。实在論と観念論は、この考え方を両極に徹底したものと言えるだろう。一方は、事物(客体)の独立性とその秩序から出発するもので、この考えによれば「事物」が知覚の根拠となる。これはいずれ素朴な科学主義的实在論に至る。また他方は、知覚する側(主体)を知覚の絶対的根拠とするもので、ここでの客体は知覚される限りで成立する表象となる。

『物質と記憶』¹において双方の体系が問題とされるのは、まずは、知覚を巡って双方が他の体系を論じる点にある。知覚を論ずる場合、实在論・観念論ともに「二つの体系の一方を立て、そこから他方を演繹しようとする」とつとめる」(MM178 [31])²ことになるのだが、成功せ

ずに二元論的対立としてお互いを論駁し合うことになってしまう。たとえば、實在論によって知覚を定義していこうとすると、事物の中から特定の物質である脳を選び出し、この働きによって表象の出現を考えなければならないが、脳は物質の一部であることから、特定の物質（一部）が多様な表象（全体）を創造するとすることに不都合が生じる。つまり、身体が動くことで全貌が変容する表象の諸体系を事物（脳）の秩序のみによって説明することができない。だから、「知覚を（脳という事物に付与される）一個の偶然的なもの、したがって神秘的なものにしてしまう」（MM178 [31]）。反対に、不安定な心的体系によっている観念論は、自然の秩序をはじめから排除しており、これを回復しようとする「こんどは科学が偶然的なものになってしまう」（MM179 [32]）。

これらが錯誤する理由は、双方が知覚としてみなしている対象が極度に思弁性を有しており、実際の知覚と隔たりがあるからである。實在論は科学の要求する秩序を前提としているため、「知覚をただ混乱した暫定的な科学」（MM179 [32]）としてしか見ず、観念論は「第一に知覚を立て、これを絶対化して、科学は實在の記号的表現と見なす」（MM179 [32]）のだが、双方ともに科学的認識にどのような地位を帰すべきか論じているにすぎない。³

双方が思弁的な認識を与えられているままの知覚とみなしている点に、実際の知覚に対する誤りがある。言い換えれば、私たちの日常的な知覚は純粹で思弁的な認識ではない。記憶が混ざり込んだり、物質が取捨選択されたりすることによって知覚は成立するとバルクソンは主張するのである。

2 イマージュと純粹知覚論

バルクソンは思弁的な認識をそのまま知覚のすべてであるとみなすことに警鐘を鳴らしている。ただし、方法として、思弁的な認識と実際の認識を対立させることはない。むしろ、記憶の働きなどを含んでいる実際の認識を極端に純化することによって、認識本来の不純性をあぶり出していく方法を採用。

具体的には、次のような手順となる。『物質と記憶』第一章では「純粹知覚（perception pure）」について論じられるが、これは「事実上ではなくむしろ権利上存在する知覚」（MM185 [39]）のことである。これは「現在の内に没入し、あらゆる形の記憶力を排して、物質の直接的かつ瞬間的な観照を獲得しうる場合にもつであろうような知覚」（MM185 [39]）として想定されている。バルクソンは私たちの認識について、あくまで「具体的で複雑な私の知覚が私の記憶に充たされていつも何らかの持続の厚みを示す」（MM185 [39]）ものだとしているが、まずは時間性を排除した知覚について考察することで従来の二元論が見落としていた認識の不純性（記憶の関わり）を背理的に明らかにしようとしている。だから、記憶という時間性を無視した「純粹知覚」の論議は、瞬間的現在の反射系に還元されることになる。

本節では、純粹知覚論を踏まえることで「物質と知覚」が「記憶」と本質的に区別されなければならない事情を見ていきたい。

イマージュ image

純粹知覚論について述べる前に、『物質と記憶』において重要な概念である「イマージュ」という概念についてふまえておきたい。

ベルクソンは第七版の序において、イマージュを「観念論者が表象とよぶものよりはまさっているが、實在論者が事物とよぶものよりは劣っている存在——「事物」と「表象」の間にある存在——」（MM161 [5]）とし、知覚されるものは本来このような中間的存在であり、それを極端に概念化したものが事物や表象であるとする。したがってベルクソンは「観念論や實在論が存在と現象とに分けてしまう以前の物質を考察する」（MM162 [6]）ことになる。注意すべきなのは、「イマージュ」は物質と表象との折衷的な概念ではないことだ。むしろ、知覚されるものの本来の姿は中間的存在なのだが、それが極端に概念化されると物質や表象として考えうるとされる。ベルクソンは思弁的な結果として想定されただけのものを徹底的に回避するためにイマージュというユニークな概念を導入し、實在の姿に沿う努力をしているのである。

純粹知覚論における物質と知覚の関係

純粹知覚論のねらいは、物理的反應系のもとで物質と表象を関係づけ、両者に程度の差しかないことを明示することにある。記憶の要素を排斥した「純粹知覚」は、イマージュ全体を限定していく働きとして描き出されていく。つまり、イマージュの総体（物質）から、身体に関係づけられるイマージュ（表象）に限定していく働きを純粹知覚とするのだ。「イマージュの総体を物質とよび、ある種の限定されたイマージュ、すなわち身体の可能な作用と関係づけられた同じイマージュを物質の知覚とよぶ」（MM173 [24-25]）

純粹知覚論は煩雑であるので、以下四つの項目にわけて述べていきたい。

- a. 物質と表象が全体と部分の関係である点／「物質の知覚」
- b. 脳は表象を作り出す器官ではなく「不確定性の地帯」である点／「脳の機能」
- c. 純粹知覚は権利上のものである点／「純粹知覚」論の意図
- d. 「ひろがり extension」が示唆されている点

これらについて順次確認していくことで、純粹知覚を概観しておこう。

a. 物質と表象が全体と部分の関係である点。「物質の知覚」

純粹知覚は、物質的な反應系においてイマージュ同士が作用と反作用をなす自然法則的な相関性の場面での知覚だ。だから、原理的にはあらゆるイマージュが相関関係をもっている場面での議論だ。ここでは、物質も知覚も身体も脳神経系も、すべて同様にイマージュとし

での相関関係として考えられている。

知覚について考えてみよう。身体のわずかな変化によってその周囲の表象が変化するのは明白だから、知覚を根拠に身体をイメージ全体の中の、中心があるイメージだと考えることは不合理な考えではない。ただ、その中心を持つ身体イメージも、イメージである限り全体の中の一部であることには相違ない。さらに、身体が行う作用（行動 action）の中心のように考えられている脳も同様にイメージであって、他のイメージを生み出したり準備したりするものではない。なぜなら、もし脳だけが表象作用の源泉であるならば、イメージの総体（物質的世界）が特定のイメージ（脳）の中にあることになり論理的に破綻してしまうからだ。（ちなみに「観念」は質的な傾向を持つとされ、純粹知覚論のような反射系の議論で扱われることはない。純粹知覚論で扱われる「知覚」は「物質」と程度の差しかないもので、物理的な振動に近いとされる。）

脳神経系の役割についての説明は次項にするとして、ここで確認しておきたいことは、知覚作用がイメージ全体からの選択ないし限定の働きによって説明されていることだ。知覚は脳が創出するのではなく、自分と関わりのあるイメージを身体という媒介を通して全体から選択し、事象を浮かび上がらせたものとして説明される。事物（現存）と表象という言葉の関係を論じている箇所では、純粹知覚における表象は事物に何かが付け加わった結果ではなく、事物から減少した結果であると述べられる。

繰り返しになるが、「物質の知覚」とは身体（特に脳）が独自に創出するものではなく、イメージとしての世界の総体から、身体イメージに関与しないイメージを闇の中に沈めていき、残った部分を「絵のように浮き出るように」選択することだ。だから、反射系である純粹知覚においては、身体イメージに対する作用と反作用において、選択をするかしないかによって非人格的な意識的知覚が説明される。

したがって、このような知覚には知覚対象に何も付け加えない「必然的な貧しさ」(MM188 [43])があるとと言えるのだが、同時に、何かを浮かび上がらせる「積極的なもの」(MM188 [43])がある。それが知覚作用の原理としての「弁別する働き」(MM188 [43])である。これは即座に身体の役割の特性になると考えられ、この役割を担う最も顕著な器官が脳神経系なのだ。

b. 「脳の機能」

さて、純粹知覚論で私たちの意識的知覚は反射系における選択の働きとされる。しかしこれは常識的には容易に認めがたい。というのも、意識的である知覚は、単なる反射としては考えにくい不確定で多様なものだと思われるからだ。そこで、純粹知覚論のなかでの知覚の多様な様相に関して、脳の役割についての考察を踏まえておきたい。

まず確認したいのは、表象は事物に何かが加わってできたものではなく、事物から選択された部分だけが現前したものである。脳神経系の役割は、神経系の電氣的信号に何かを付け加えることによって表象を創造することではない。また、選択されなかった部分は、身体に

よって選択されなかつただけであり、存在しないということではない。ベルクソンは脳を「一種の中央電話局」(MM180 [34]) にたとえているが、これは「通信をつたえること、あるいはそれを待機させる」(MM180 [34]) 点で、脳神経系とそれが似ているからだ。しかし、先ほど述べたように、物理的な反射によって、知覚の多様な様相をいかに説明するのかという疑問が生じる。

『物質と記憶』では、知覚の多様で多義的な反射は「不確定性」として検討されている。そしてこの不確定性の手がかりは神経系の発達にあるとされる。神経系の集積としての脳は、まずは神経系の中核（「中央電話局」）として考えられるが、その複雑さに応じて与えられた刺激への対応が多様化していくことが述べられている。重要なのは、物質としての脳の複雑化によって生命体の作用の幅や自主性が生まれることであって、これにより脳は「不確定の地帯」だとされる⁴。脳神経系は、その進化、複雑化にしたがって己の利害関係の範囲が増大し、不確定の地帯（弁別する範囲）が増大する。これによって作用の猶予が生まれる。この作用の程度が意識的知覚の基盤であって、多義的反射の要因となる。⁵

c. 純粹知覚は権利上のものである点／「純粹知覚」論の意図

意識的知覚の基盤は神経系の反射と示された。次に、「有機体と、多少とも遠くにある対象とのこのような関係が、なぜ意識的知覚という特殊な形をとるのか」(MM183 [37]) が課題となる。

純粹知覚では不確定性の程度に応じて生命体と対象との間に利害関係があると考えられ、これが生物の主観性の基礎を意味しているのだが、このように非人格的な、反応系そのものと同義であるような主観性は、私たちが一般に感覚するような有意的行動や意識的知覚とは性質の異なるものだ。この違和感が生じるのは、意識的という言葉をもつて人格的という意味でとらえているからだ。

純粹知覚は「事物についての私たちの認識のまさしく基礎」(MM184 [38]) ではあるものの、「純粹知覚、事実上ではなく権利上存在する知覚」(MM185 [39]) でしかない。人格性を有する意識のありようを請け負うのは記憶力であり、記憶、あるいは時間的持続性を恣意的に排除している考察ではここまでが限界なのである。記憶という時間性を排除した論議はすべて瞬間的現在の反射系（純粹知覚）に還元されたわけだが、ベルクソンの言う「具体的で複雑な私の知覚」(MM185 [39]) は、非時間的な表象と物質の混在やそれらの選択には終わらず、イマージュとしての表象と物質の反射系に記憶や感情が不可分的にまわりついていなければならないことを示すことになる。

d. 純粹知覚における「ひろがり extension」

ところで、「不確定の地帯」で手がかりにされた神経系の発達にまつわる言説は、既に述べたように選択の不確定性をもとに意識的知覚の基盤を論じたものであった。しかし、同時

に気がかりな考えも示されている。それは「ひろがり extension」という概念をめぐるものである。

これは神経系の複雑化にともなって「動物の利害に関わる物体の作用が感覚される距離もまたそれだけ増大する」(MM182 [36])とされている箇所からも読み取れ、「知覚の広さは後続する行動の不確定性の精確な尺度をなすことが肯定される」(MM183 [37])とか、「行動が時間を処理するのと正確に比例して、知覚は空間を処理する」(MM183 [37])とかいうように主張されている。

文脈上、ここでは不確定性と行動の関わりが述べられているから、純粹知覚において「弁別の働き」(選択)が空間的に拡大していくことで、これが知覚における非人格の主観性を担うようになることが述べられていると、さしあたり理解できる。ただ、弁別する働きの方ではなく、「ひろがり」という概念に着目してみよう。これは「空間」である。ベルクソンは概念や事物の空間化に非常に慎重で、特に「質」的性質だとされる主観的要素(時間や精神)の空間化(量化・等質化)を拒否している。それにも関わらず、意識的知覚の基盤とされる考察に空間的要素がまぎれ込むのは異様であるように見えるのだ。

仮に、純粹知覚が「権利上存在する知覚」であるという理由から、時間的要素がない純粹知覚の場面での「ひろがり」は知覚を脳神経系の発達という非人格的な場面に限っているから無視できる、あるいはたいした意味がない、としてみよう。しかし、「ひろがり」という概念が頻繁に顔を出してくるのは純粹知覚に「感情」を導入する箇所なのである。⁶

一般に、「空間を占める表象的状态から、延長をもたぬように見える感情的状態へ、だんだんと移ってしまう……(中略)……ひとは、感覚というものはすべて本性上必然的にひろがりをもたず、延長は感覚につけ加わるのであり、知覚過程とは内部状態の外化にほかならないのだと結論する」(MM202 [60])。だが、ベルクソンはこういった習慣的な錯覚を否定する。「ひろがりのない諸感覚、これが膨張・肥大してひろがりを持ち、私たちの延長をもつ身体をまずあたえ、ついでほかの物質的諸対象をあたえることになるだろう。しかしながら、まさにイマージュと観念、すなわち一方は延長をもち他方は延長をもたない両者の間に、感情的状態という多少とも漠然と限局された一連の中間的状态が存在するのでなければ、そのような奇妙な想定は不可能であろう」(MM202 [61])。

つまり、ベルクソンは純粹知覚論の中で意識的知覚の基盤を示したわけだが、同時にそれが「ひろがり」をもったものであることも示している。これは、物質が延長の性質をもち、精神ないし記憶が非延長の性質もつという従来の固定観念を拒否し、「現実的なものは、分たれる延長と純粹な非延長物の中間にある何ものか」(MM372 [272])であることを示すものなのだ。

3 「程度の差」——知覚と物質

さて、ベルクソンは行動のための知覚を考えるべきだと主張している。行動のための、と

は、現在の様々な要求に応えるために有益な知覚のことであり、私たちが日常おこなっている認識だ。知覚の反応系の部分（純粹知覚）は認識のある一側面（現在の要求に即応するイメージを選択する役割）を担うものの認識一般と同一ではないので、それぞれを峻別することが必要である。記憶を含んでいる「認識一般」と、知覚の反応系としての部分とを混同してしまうことにより、記憶と知覚を同一レベルで考えてしまう混同が起きてしまう。

こうした視点で考えると、純粹知覚を扱う『物質と記憶』第一章は、明確な意図をもって設定されている。ベルクソンは純粹知覚の場面では記憶が担う質的な要素を無視して認識の考察を進める。このような便宜上の措置は、認識において量として考える部分を取り出して考察しておくために採られたものだろう。だから、反応系の部分に対応する「純粹知覚」には特殊な意味があると考えなければならない。純粹知覚（物質の知覚）と知覚される対象（物質）、脳の能力と機能とは段階的な相違しかなく、本性的な相違がない。というより、それぞれはイメージと規定されているのだから、「表象」は「物質」からその要素が多少とも減少した（身体によって選択された）イメージであり、程度の相違こそあれ、それぞれに本性的な相違はあり得ない。

行動的な知覚は、中心的なイメージ（身体）の僅かな変化にも全体を変容させる諸体系である。瞬間的現在には常に過去になっていくはずで、過去になっていった記憶が常に中心にあるイメージに関わってこなければ、持続的な日常の多様な変化の知覚は不可能になる。そうすると、行動的な知覚とは、身体イメージの現在に向かって過去が関わってくるものとして考えられなければならない。こうして時間性が排除された純粹な反応系が描出されたあとで問題になってくるのは、脳神経系が分離した間隙を満たすという意味で知覚に主体的に関わってくる活動、記憶の働きである。記憶が導入された議論になって初めて、知覚はその時間性を取り戻すことになる。

第二章 再認の規制と純粹記憶、ベルクソンの記憶論

純粹知覚論は、物質と知覚には程度の相違しかないという議論であり、脳の特定位点の変化によって身体に初発的反作用を起して表象を作り出すという議論とは異なるものであった。脳は神経系の中核であり、神経系における電氣的通信網の中心的な場所に位置するものの、記憶とは無縁であるとされる。知覚に参加する記憶力の形式が検討されることによって、脳の機能ではない記憶そのものの存在が示唆され、一般には記憶が脳にしまいこまれてあるとか記憶が脳の機能であるなどと信じられているが、そうでないと立証された記憶そのもの、「純粹記憶」についての考察が要請される。

私たちの認識が知覚のみによるのではなく、むしろ常に記憶の影響下にあることを示すのが『物質と記憶』における記憶論であり、①再認における知覚の規制としての記憶（『物質と記憶』第二章）と、②記憶そのものの存立（『物質と記憶』第三章）として考察されてい

る。前者は認識され経験として現前する知覚の規制に関する記憶、後者は記憶自体の保存を示している。ベルクソンは記憶そのものとして定義される「純粹記憶」が現実化することによって知覚に参加するとするわけだが、記憶の知覚への心理的なかわりと、記憶そのものの存在とは分けて考えられるべきだと思われる。本章では、記憶の認識論的ないし存在論的区別の必要性についてドゥルーズのベルクソン解釈を手がかりに考察した後、『物質と記憶』に戻り、記憶の心理的働きと記憶の在り方について確認したい。

ドゥルーズは『ベルクソンの哲学』の中の「潜在的共存としての記憶」という論考で、『物質と記憶』の記憶論では、存在論的無意識と心理的無意識が区別されていると主張している。

記憶の働きは、『物質と記憶』では次のように述べられていた。

「知覚は、どんなに短くとも、つねに何らかの持続を占めるものであり、したがって、多数の瞬間を互いに他へと延長する記憶力の努力を要求する。のみならず、(中略) 感覚的性質の主観性は、とりわけ、私たちの記憶力の働きによる一種の収縮からなっている。要するに記憶力は、直接的知覚の素地を記憶の布でおおう限りにおいて、同時にまた多数の瞬間を集約する限りにおいて、この二つの形式のもとで、知覚における個別的意識の主要因、すなわち事物についての私たちの認識の主観的側面を構成する」(MM184 [38-39])。

ドゥルーズは、この二形式は「記憶内容の現実化の視点」と「記憶そのものの視点」として区別されていると捉えており、それぞれは「同じ区別の原理によっていない」として注意を促している⁷。重要なのは、この心理的機能が存在かという区別が単なる着眼点の相違ではないことだろう。ドゥルーズの論点には次のような事情があると思われる。

後述するが、『物質と記憶』第二章のような認識の心理的なありようの場面では、現在の知覚の要請(必要性)に応えるために現実化されていく記憶を考えることができる。ただし、現在の知覚に関与する記憶だけが記憶のすべてだとは考えられないため、「無意識的な」(MM283 [159]) 記憶の存在を想定する必要があるが出てくる。これは、心理上いかなる機能もしない、いったん知覚されたものの認識に対して無力な潜在的な記憶(純粹記憶)である。このような記憶の潜在性と、知覚に参加する記憶の顕在性が、ドゥルーズの主張する区別の原理だと考えられる。

ここで、『物質と記憶』における記憶論を概観しておこう。先に述べたように、①再認における知覚の規制としての記憶と、②記憶そのものの存立の項に分け、まとめておきたい。

①再認における知覚の規制としての記憶

記憶の心理的場面にあたる記憶が知覚に関わる働きは、具体的には『物質と記憶』第二章の「記憶力の二形式」(MM227-235 [90-105])の項を指している。『物質と記憶』において認識とは「再認 reconnaissance」(MM239 [104])であって、ある対象を再び知ることと考

えられている。

再認には、記憶の働きが二つの形態で関わってくる。一方は、「身体は、思考されるよりもむしろ演ぜられるまったく受動的な再認によって、復活した知覚に自動的になった進行を対応させる」「反復される」記憶であり、他方は「現存する知覚に対処する記憶心象によって積極的に行われる」「思い浮かべる記憶 imaginer」である⁸。一方の「反復する記憶」は、身体的な自動運動であると考えられるため、時間的な観点で見れば、瞬間的な知覚に極めて接近する。他方の「思い浮かべる記憶」は、「最も現在の状況の中にくい入る力のある表象を、現在に導くために過去へ捜しに行く精神の労働を含む」(MM[91])のものであり、過去のイメージであると考えられる。

したがって、時間的持続性を含む記憶力は後者の形態の方であると考えられている。ただし、具体的な認識を考えてみた場合、「思い浮かべる記憶」だけで論じようとする訳にはいかない。なぜならこれは「自発的記憶」と言え、私たちの現在の意思というか現在の身体の必要性に従属しているわけではなく、したがって認識の場面にとって「有益な」ものだけがあらわれてくるということはほとんど考えられないからだ。たしかに、「思い浮かべる記憶」は過去が現在の知覚に現れる（現実化する）働きではあるが、必要性に則して現れようとするような恣意性は記憶（過去）には求められないのである。このことはまた、私たちの利便性の側に傾いている認識の場面で「感覚＝運動的記憶力」（第一の形態）が認識の基盤となって選択をしていることを意味している。

ここまでの再認に関わる考察で注意しておきたいことが二点ある。

一つ目は、運動的記憶力は現在において自動的に反射的になされるたぐいの記憶を指すが、それとともに「思い浮かべる記憶」が現在において現実化する場であるとも考えられている点だ。ここから、現在において過去を把握しなおす行為としての「再認」が取り上げられる。『物質と記憶』の認識が「再認」を意味すると述べたのには以上の理由がある。

二つ目は、ベルクソンが過去を二つの形態に分離して記憶論を考察していること⁹の重要性についてである。「運動的記憶」が再認の場としての役割を果たし、「思い浮かべる記憶」が再生されて再認されることになることは、言語聾についての研究（MM254-261 [125-132]）と失語症についての研究（MM261-272 [133-146]）を通じて心理学的に実証されるのだが、ベルクソンの批判の対象となる心理学者たちは、運動的記憶と思い浮かべる記憶が混在した状態しか考えないため、再認に関わってこない無益な記憶や、関わる事が任意な記憶イメージを捨象してしまう。こういった事態を避けるため、ベルクソンは二つの形態に分けていると考えられる。

さしあたり重要であったのは、過去が運動機構として、あるいは独立の記憶として保存されることである。再認において、「運動」と「記憶イメージ」とに弁別された記憶力がいかに関係するかということが述べられる。「運動によって実現される自動的な再認」(MM244

[114]) の考察と検証がなされる「再認一般について」(MM235-244 [105-114])、それから、「記憶イメージの規則的介入を要求する」(MM244 [114]) 再認についての考察と検証がなされる「再認と注意」(MM244-254 [114-125]) のそれぞれにおいて、過去が保存される二形態が述べられていく。

「運動によって実現される自動的な再認」について見ていこう。ベルクソンは「熟知感」についての心理学の連合説を批判し、知覚と記憶を同一とみなす考え方を排除する。ベルクソンが熟知感の議論で主張するのは、まずは、「極限において、瞬間における再認がある」(MM239 [108]) ことであり、「再認の基礎には、運動的な或る現象がたしかに存在するよう」(MM239 [109]) だということである。そしてさらに重要なのは、この運動的記憶にいかにして記憶イメージがかかわってくるかを論じる点である。

再認において「(感覚＝) 運動的記憶」が存在することに注目しよう。ここでは瞬間における再認が形成される時点を「熟知感」を巡って見届けておく必要がある。未知感と熟知感との間には自動運動的再認が生まれつつある中間的な状態があるはずだ。そしてこの「形成過程にある機構は、既成の機構と同じ形で意識にあらわれることはできない」(MM240 [110]) と考えられる。後続の知覚は、「先行する運動の中でつづく運動が予め形成されること、部分が潜在的に全体を含むようにするあらかじめの形成」(MM240 [110]) から「熟知」という「独特な様相」(MM239 [109]) をもつ。たとえば、あるメロディーの熟知感は、初めて聴いた時と後続して聴いた時の相違として考えることができるが、後に聴く時は反射的に知覚を行おうとするため、知覚が「身体を適切な自動的反応に向かわせる」(MM239 [109]) 運動があるだろうと推察される。後で聴く際には、メロディーの音符を身体が予め演じながら知覚することで熟知感という様相が現れるのである。

さて、熟知感のある再認は、運動的な記憶が状況に対して親密になったものであることを意味する。身体によってごく自然に「演ぜられて」いるのだ。反復される形式の記憶は、その親密性を信頼して、与えられた対象を運動反射的に処理することで再認の基盤になるとされる。では、状況に対する親密性に「亀裂」(MM241 [111]) が生じた場合はどうなるだろうか。運動的記憶は有益性に適うか否かという現在の態度を表明しているため過去(記憶イメージ)の介入を許さないが、「亀裂」が生じた際、ここに記憶イメージが滑り込んでくるとされる。つまり、与えられる対象と連関する過去を記憶の中に捜しに行き、そこにおいて「思い浮かべる記憶」が現実化し、これが「亀裂」に挿入されることで再認が構成される。身体の現在では再認を維持できないため、精神の「緊張」をともなった注意的な再認(「回路としての認識」)が必要となるのだ。

ここまでの論点をまとめておこう。再認は運動的記憶がその基盤を務めている。運動的記憶の熟知感の形成において、物質は身体に「演ぜられて」いる。また、熟知感を感じない場面では常に記憶イメージが現在の印象と随伴運動との「亀裂」に挿入されている。「現在の対象の再認は、それが対象から生ずる場合は運動によって行われ、主体から発する場合は

表象によって行われる」 (MM224 [91]) とされるのである。

ところで、これまでの再認の規制は単に身体の反射運動に過ぎなかったのだが、これから見ていく注意的再認を巡る議論では、現在の行為である再認への記憶の介入が考えられており、ここで積極的に論じることができるのは記憶の一面（現在に有益な部分を差し向ける傾向）のみである。つまり、認識に関わってこない部分の記憶、記憶そのもののとされる「純粹記憶」には触れられない。ただ、「純粹記憶」にも言及しうる議論でもある。なぜならば、当面は現在に介入する「記憶イメージ」でしかないものの、「過去」が本格的に論じ始められるからだ。

さて、運動によって実現される自動的再認は非注意的再認とされ、この記憶は、瞬間的反射系と近似的なものとして考えられる。これから論じるのはこのような非注意的再認ではなく、注意的再認である。再認が注意的であるということは、要するに、「[自発的な動きをする] 記憶イメージが規則的に [運動的記憶と近似の] 知覚と結びつく場合」(MM244 [115]) のことを言う。

注意的な再認は「回路」(MM249 [120]) として考えられている。まず、記憶すべてが多層的に知覚の現場に控えていて、ついでこの記憶総体を利用した「投影」の働きが行われる。「記憶イメージ」の「投影」によって、知覚は常に新しく「創造」される。注意的再認は、自発的に現実化された記憶（記憶イメージ）が外部（対象）に投影されることを示しつつ、記憶イメージが知覚において生成されるとも述べられている（cf.MM247 [117]）。ここで重要なのは、投影されて再認が成立するということと、投影される個々の「記憶イメージ」の存立についてだ。「記憶イメージ」は時間につれて配列されているイメージであり、（運動的記憶である）現在の知覚の場に投影されることによって知覚が成立するとされているのだ¹⁰。こういった記憶イメージが脳機能であるとは考えられず、ここに至って記憶は、運動＝感覚的知覚（運動的記憶）とは独立的に存在するものであると考えられるのである。「時間につれて配列される記憶から、おのずからな推移をへて、運動への移行が行われ、この運動は生まれつつあるその行動あるいは可能的行動の構図を描く。脳の損傷はこの運動を冒すけれども、この記憶を冒すことはない」 (MM224 [92])

注意的認識（回路としての再認）は記憶の顕在化を示すものであるが、同時に脳機能とは別に記憶自体が存在することをも示している。記憶にはいくつもの段階があり、注意的な認識はこれに関与する記憶の段階に応じて、様々な可塑性や柔軟性をもってあらわれる。記憶の諸段階は、それぞれが記憶すべてを含みながら反復させていく働きにより、認識の場に居合わせている。『物質と記憶』では、失語症と言語聾の研究により以上の記憶論を立証していく。ベルクソンによれば、言語聾の原因は語が失われることではなく、語を喚起する体制

が損なわれていることによるとされる。また、失語が文法（品詞）的秩序順に行われることから、機能（投影）の弛緩が起こっているとされる。構造的に失語するという事態は、全体からの投影という記憶論を擁護し、記憶の局在ないし観念的実体化を批判するのに有用だったのだ。ベルクソンは、記憶とその運用が「動的進行」であること、記憶が脳に還元できない独立性をもつことを明らかにする。

ところで、ベルクソンの記憶論は、決定的な転換がなされていると読める。その転換点とは、後で述べるように、顕在性から論じていた記憶を潜在性の内でとらえていく方法ののっとしており、一見等質的であるかのような顕在性を異質的な潜在性の中に回収してしまうのだ。まずは潜在性、「純粹記憶」を踏まえておくことが先決だろう。

②記憶そのものの存立。潜在性における「純粹記憶」の「緊張」

——『物質と記憶』第三章

『物質と記憶』第三章の冒頭で次のように述べられている。「私たちは三つの項、すなわち純粹記憶と記憶イメージと知覚とを区別したが、もとより、それらはじっさいには、いずれも、孤立して生まれるのではない」（MM276 [150]）。本性の相違が強調されながら掻き消されているかのようなこの言及には、潜在性が主題化される第三章において、「純粹記憶」「記憶イメージ」「知覚」の関係にまつわる次のような事情があると思われる。

まず、「純粹記憶」はすべての過去が残存する莫大な集積体であって、全体として多層的に存立する。これに対して「記憶イメージ」は個別的なものであり、全体としての「純粹記憶」から分離される中でとらえられるものだ。また、知覚は運動＝感覚的な反射である。「純粹記憶」は現在に対する過去そのものを意味する。これに対して「記憶イメージ」は、瞬間的認識としての現在の知覚に向かって投影されたものであり、したがって現代的であるだろう。知覚は運動＝感覚的な反射系として身体に沈澱しているものだから、現在のなものであることは言うまでもない。そうすると、「純粹記憶」「記憶イメージ」と「知覚」には、それぞれ「過去」と「現在」という相違がある。「記憶イメージ」は再認の規制において単に感覚＝「運動的記憶」と対比的なものとして考えられていたが、潜在の状態から多少とも現実化し現在の知覚に挿入されるものである以上、純粋な過去、純粋に潜在的な記憶ではない。こうして心理的場面で活躍する「記憶イメージ」は、純粹記憶を発出源とはするものの、心理的、現代的なものであると規定し直されるのだ。これは重要な展開だろう。なぜなら記憶と知覚という本性の差は、さらに徹底されて「純粹記憶」と「純粹知覚」、潜在性と現実性に先鋭化させられるからである。これは後に述べる時間的な区別化の準備となる。

『物質と記憶』第二章での記憶論は記憶イメージ（顕在化した記憶）にしか届かない心理学的論考であって、それは注意的認識の過程において記憶の自発的な働きが示唆される場面でも原則的には同様である。このような場面で語られる記憶イメージは「記憶」の一

面、現実の有益性に対応する傾向に傾いた記憶でしかない。記憶イメージは顕在化した限りで個別的に存しうるものの、全体である潜在的な「純粹記憶」から顕在化する部分でしかない。「純粹知覚」の場面でもそうであったように、ここでも全体からの部分を選択するという論理がはたらいっている。記憶の顕在化とは、潜在性である純粹記憶の現実化を意味し(imaginer)、思い出す(想起する、se souvenir) ことではないと明確に述べられている¹¹。想起することは、純粹記憶の領域へ入り込むことであり、純粹記憶が顕在化することとは違う。そうすると、想起という現在の努力が入り込むところの「純粹記憶」が明らかにされなければならない。そして「純粹記憶」は定義上、想起され経験される以前の状態でなければならない、潜在性以外の何ものでもない。

『物質と記憶』第三章では純粹記憶(過去)の存在性が研究され、知覚と記憶が根本的に異なるものであることが示される。また、記憶力自身の働きによって「緊張」の概念が示唆される。ここでは、純粹記憶(過去)の存在性を述べた上で、記憶本来の働きに言及していく。

(a) 純粹記憶の存在——潜在的過去は、それ自体で残存する。

潜在性は「純粹記憶」の本質であるとされる。また、過去の本質であるともされる。ただ、知覚に顕在化(現実化)する限りの潜在性である必要は微塵もない。このような潜在性をどのように理解すればよいだろうか。ベルクソンは「無意識」について非常に特殊な考え方、用い方をしている。これをもとに考えてみよう。「無意識」という用語は、一般には心理学の用法で用いられている。この心理学の用語としての「無意識」は、日常の精神に影響を与えている心の深層、「前意識」「下意識」とも呼ばれる「意識」の潜在的な状態のことである。しかし、ベルクソンはこのようなものを無意識とは呼ばないし、また心理学的無意識の潜在性をもって純粹記憶の本質とするのではない。

ベルクソンは「無意識的心理状態を考えることとにかく難色がある」(MM283 [159])と言う。なぜなら、心理学的「無意識」は意識の表層に現れていない心理的実在を指すが、ベルクソンの「無意識」は、心理的でない実在を指すからだ。これは記憶の潜在性についてたいへん重要な考え方であると思われる。なぜならば「意識の外に存在するということ」(MM284 [161])は、潜在的「意識」を示しているのではなく、潜在的「客体」を示しているからである。このように、意識にとってはまさに「無用な」物、これが潜在的記憶とされるのだ。

過去が何らかの心理ではなく、何らかの存在であることを示すベルクソンにとって、「無意識」という言葉の規定は重要である。「心理的なものは存在の同義語ではなくて、たんに現実的行動あるいは直接的有効性の同義語にすぎぬ」(MM283 [160])と言われるように、ベルクソンにとって心理的なものはすべて顕在的な意味であり、現在のなもの、「現実性」を指している。

現在を持続的時間の断面であるような瞬間的現在だと考える場合、このような「現在は在

在しない」(MM291 [169])。現在とは存在するもの *ce qui est* というよりは出来つつあるもの *ce qui se fait* であるため、断片としての現在は存在せず、すぐれて存在するのは、本性上潜在的な「過去」とされる。『物質と記憶』では非常に煩雑な二つの議論が同時に進行しているようにも読める。一方は、時間的位相における記憶の存在性に言及する形而上学的議論、他方は知覚に関わる記憶の心理学的議論である。しかし、ここでは心理学的課題が扱われているとは考えられない。なぜなら、ここでは潜在的過去である記憶の存在性について考察されているからであり、これは潜在的という意味からも、また時間という位相からも、心理学的考察ではないと判断できるからだ。

「現在は存在しない」とは、現在より過去が存在するというのではない。そうではなくて、どんなに短い知覚でも無数の記憶が介在している以上、一定の「持続の厚み」を占めるわけで、現実的（現在の）知覚を考えるにしても、「純粋な〔瞬間的な〕現在とは未来を侵蝕する過去のとらえ難い進行なのだから、私たちは實際上過去を知覚するのみである」(MM291 [170]) と考えなければならない。

ここでも、知覚に依拠し過ぎることは避けなければならない。むしろ知覚が依拠する時間の存在性に議論の主軸がある。知覚を成立させる実情には現在と過去の関係がかかわっている。瞬間的現在と考えられる現在は、未来に向かって不断に進んでいるから、知覚される実在は感覚＝運動的な現在が支配するというよりは、記憶の潜在性の働きによって語られるべきなのではないか。そう考えると、想定していたような断片的な現在は、すでに現実化している過去、ないしは過ぎ去ったばかりの現在としか言えない。さて、過去はどのように存在するか(保存されるか)。「いったん知覚された過去は、消滅するという理由はない」(MM284 [160])。また、仮に脳の中に保存されると想定してみても、脳は時間系においてそれ自身で保存されなければならなくなり、不合理である。それゆえ過去は「それ自体で残存する」(MM290 [160]) と主張されることになる。こうして、この過去は現在に対して「無力」であり、無意識だとされるのだ。

「現在」について続けよう。記憶論のポイントの一つは、現在の知覚にすべての記憶（過去）が控えているというところだ。記憶の潜在的存立を示す記憶の円錐モデル (MM293 [172]) において、身体的現在が記憶の先端としてしか考えられていないことは、ここでの身体が瞬間的現在という意味合いを強く帯びていることを端的に示している。ここでの身体は、〈純粋記憶の身体〉とでも言われうるものであって、「純粋知覚」的な議論は無視されている。感覚＝運動的なものも記憶に還元されている。円錐の頂点S、これは再認という心理的な説明の場面では純粋記憶が現実化される身体を意味するのだが、時間的な経過とともに「不断に進化する」(MM293 [172]) 頂点であり、記憶（過去）としての身体でもある。そう考えると記憶の円錐モデル中のSABは、記憶の潜在性を示していることになる。

記憶の潜在性について、記憶の円錐モデルをもとにまとめておこう。現実的な知覚には無数の記憶が介在しているから、知覚される実在とは感覚＝運動的な反射系において現在が処

理するというよりも、記憶の働きによって説明されるべきものとなる。それゆえ、現在の身体はここでは無視されることとなる。

(b.) 純粹記憶の働き

『物質と記憶』で「過去」や「現在」の本性は、そのまま「記憶」や「知覚（物質）」の本性を意味している。「過去」とは活動をやめたかつての現在であり、知覚する現在に対して本質的に無益であり、無意識的に存在する。この意味で、純粹記憶としてそれ自身で残存する過去は、その本性を潜在性として規定される。

さて、ここで、「純粹記憶」の最も根本的な働きについてまとめておきたい。ベルクソンは記憶の働きについて以下のように二通りあると述べていた。「[実際上は知覚と分けることの出来ない] 記憶力が、現在の中に過去を加え、また持続の多数の瞬間を、唯一の直観の中に集約するのであり、こうしてその二重の操作によって、私たちは物質を権利上それ自体において知覚するのに、実際上は私たちの内で知覚する結果になる。」(MM219-220 [84-85])

一方の「現在の中に過去を加える働き」は、記憶が認識に関わってくる議論で中心になる働きであり、他方の「持続の多数の瞬間を唯一の直観に集約させる働き」は、現在と過去の存在に関わってくる働きである。そしてこの後者は極めて重要である。なぜならこの働きは、現在の再認が成立するために、知覚と記憶を同一のイメージとして把握させるという働きであるからだ。ベルクソンはこれを集約、収縮 *contracter* の働きと呼ぶ。現在は絶えず過去化するため、知覚自体も存在論的には記憶である。これを「現在」の知覚（日常的な再認）として経験するためには、次の瞬間の知覚と同一視することを必要とするだろう。これ（持続の多数の瞬間）を同一視（唯一の直観に収縮）させるのがこの働きである。

「純粹知覚」によって取り除かれた主観性は、記憶の収縮の働きが導入されることで回復する (MM220 [85])。しかもこの収縮の働きは、私たちが常に過去化され続けている現在に生きている以上、不可避な働きなのである。

さてここまで「純粹記憶」の働きを『物質と記憶』に沿う形で概観してきた。特に第三章では潜在性としての過去を軸に論展開されているわけだが、それが論じられる場面では多少とも現実化した心理的場面が予想されてしまう。質と量の潜在的存在性を示すにしても、心理学的場面では「緊張」によって示唆するに留まらざるをえない。

ベルクソンの主眼は物質と記憶の交叉としての認識をとらえることであるので、心理学的な研究に裏打ちされた考察がなされるのは当然のことではある。しかし、心身問題を取り上げるにあたって、これは持続によって実在をとらえようとする形而上学的問題であるため、心理学的な研究を転回させて一元化に取り組む必要がある。こうして『物質と記憶』は、「純粹持続に身を置き」(MM322 [208])、この展開としての一元論を論じていくことになる。二元論はここで、持続が質的あるいは量的傾向へ傾いたものについて「記号的図式」が付与

された、人為的で作為的な議論でしかなくなってしまうのである。

第三章 心身一元論の準備としての方法的二元化について

本来の認識は物質と記憶の混然とした状態だが、この有様を考察したり記述する際には、物質を主とするか記憶を主とするかによって實在論的になったり観念論的になってしまうのが常である。そして、こうして論じられたものそれぞれを実際の認識と混同しまうことも日常的なことではある。

ベルクソンの試みは、物質と記憶のそれぞれがイメージであるとするのであらかじめあった分断を無くし、否定性をもってではなく収縮や弛緩といった連続性をもって対象をとらえ、心身二元論を回避しようとするものである。『物質と記憶』が心身合一を語りながら様々な議論上の対立について執拗に言及するのは、徹底的に考えられたはずの「認識」がその思弁性のゆえに実際の認識からほど遠いものになってしまっていることを明らかにし、本来の有り様を取り戻すためである。

『物質と記憶』の副題は「精神と身体の関係について *essai sur la relation du corps à l'esprit*」である。私は、物質（「身体」）と記憶（「精神」）とのかかわりを論じるためにはベルクソンの方法について考察することが重要だろうと考えた。私が指摘したい方法的二元化とは、心と身体の諸性質が「ひろがり」ないし「緊張」といった概念装置によって、連続性を保ちながら区別されていく方法のことである。これは論の軸とは言えないだろうが、一元化を目論む上での周到的な用意と考えることが出来る。

本章ではまずこの方法の特徴について述べ、ついでベルクソンの独特な方法とそれによって考察された物質と記憶の本性の相違について、ドゥルーズによるベルクソン解釈であるところの「潜在的共存としての記憶」をもとに考察し、明らかにすることを目指したい。ベルクソンの独特な方法とは「時間的区別」となるだろうし、これによって区別される本性の相違は、心と体の峻別ではなく、記憶と物質についての二元性の再定義を意味することになるだろうと思われる。

1 『物質と記憶』における方法的二元化

方法的二元化について私が考え始めたのは、『物質と記憶』において「ひろがり」や「緊張」の概念が、それぞれ収縮ないし弛緩という両極の中間として規定され、記憶や知覚における感情の特性などを説明する際に頻繁に用いられていたからである。

記憶と物質、このそれぞれの関係性は「否定によって定義するのではないから、これ〔二元論的対立〕を解決不可能とみなすわけにはいかない」（MM317 [201]）とされており、それぞれは潜在的状态においては対立していないものとして考えられている。この具体的な論証方法についてベルクソンは明確に言及し、延長と非延長の対立を純粹知覚論の中のひろが

り概念によってとらえることで、また、量と質の対立を純粹記憶論の中の緊張の概念によってとらえることで、それぞれの対立を緩和すると述べている¹²。これは、時間的区別がおちいりかねない陥穽を避け、問題を適切に扱うための措置であろうと私は考える。

ベルクソンが論及していることではないが、記号的図式化には否定の契機があり、これが対象の把握をずさんにしてしまうのではないだろうか。否定という概念は想定されるが、「否定」を実在において指定することは難しい。やや飛躍するが、ベルクソンは、存在するもの(物質、意識)を相互の否定によって規定しようとはせず、その存在性(持続)の傾向によってそれぞれを定義し直し、関係性について言及しようとしているのではないだろうか。このように考えてくると、ベルクソンが『物質と記憶』で行っているのは、伝統的二元論の純粹に思弁的な空間的区別化を本質的に排斥することであると言える。対して、『物質と記憶』は時間的区別の原理によっている。ベルクソンは、身体と精神の関係を述べるにあたって、「空間的区別にかえるのに、時間的区別をもってした」(MM355 [247])とし、これは、『物質と記憶』の全文を貫く思想と言える。

時間的区別をしていこうとする際に用いられる「ひろがり」「緊張」は、したがって重要な概念装置であると言えるが、これを辿っていくと気になる点がある。それは、これらの装置が、前者は純粹知覚論で後者は純粹記憶論でというように別々の場で扱われており、論展開の上で段階的に提示されているのである。そもそも「ひろがり」が純粹知覚で、「緊張」が純粹記憶でとりあげられるのはなぜなのだろうか。

延長と非延長の問題が記号的図式化の結果と考えれば、これは悟性の作為的な所産ととらえることができるのだが、問題の本質は、これらが顕在化した対象についての考察結果であるということである。本来、実在は不断に運動していると考えられるから、その延長を規定することは実は非常に困難なことだ。それゆえ、時間性を排除した状態を想定し、そこでイメージ本来のひろがりとして提示したのではないかと考えられる。「純粹知覚」が記憶力の弛緩の極限にあることにより、「ひろがり」を論じるに適切な場であったからだとも言える。

また、「緊張」が示される質と量との問題ではどうか。熟知感の考察で述べたように、質が発生するには記憶の介在が不可欠である。記憶が身体に運動＝感覚的に沈殿するものであれ、亀裂に差し込まれるものであれ、そこには知覚の時間的進行が前提とされていなければ説明ができない。とすれば、「緊張」の概念は記憶力が多少とも収縮する場面、記憶論の中で論じなければならないだろう。

このように、ベルクソンの時間的区別は知覚を議論の中心に据える限り、空間的区別に陥りかねない危険性をはらんでいると考えられる。イメージと名付けたとしても対象が顕在化した時点のみで諸性質を考察すると、ひろがりや緊張といった装置によって示そうとする動的な性質が失われ、対立構造として認識されてしまいかねない。だから、この危険性を回避するためには問題化されえない場を選んで取り扱われなければならない。したがっ

て、それぞれの概念について論を選んで提示するのは、問題を適切に扱うための措置だったと考えることが妥当だろう。

ベルクソンは『物質と記憶』第四章で持続による一元論を述べているが、ここで具体的知覚に言及する時点で、「ひろがり」や「緊張」の役割がはっきりしてくる。「ひろがり」「緊張」の諸状態、弛緩したり収縮した状態として描かれる延長と非延長、量と質は、分断されたものではなく互いに溶け合うものとされるのだ。つまり、それぞれが「収縮」「弛緩」という両極の中間として規定されていることにより、具体的知覚が把握する運動そのものを示唆している。これは心身一元論への大きな足がかりになっていると思われる。

「この方法の工夫といえば、要するに、日常的ないし功利的な見地と真の認識のそれとを区別するだけのことである。私たちが自分の行動を注視するときの持続、自分を注視することが有益であるときの持続は、諸要素が互いに分解し並列する持続である。しかし私たちが行動するときの持続は、私たちの諸状態が溶け合うときの持続」(MM322 [208])である。

2 二元性の再定義について

—ドゥルーズ「潜在的共存としての記憶」をてがかりに—

さて、『物質と記憶』は、心身二元論の諸説に根ざした問題に取り組むことを出発点としている。ベルクソンによって、その最も典型的で根本的な謬見とされるのは人間の悟性に関するもの、「私たちの悟性が一方で延長と非延長との間に、他方で質と量との間に設ける二重の対立」(MM317 [202])にある。ベルクソンが批判する心身論には、心や記憶の本性は質でありかつ非延長であって、身体や物質の本性は量でありかつ延長であるという前提があるのだが、従来の二元論に反論するのはこの前提において、二項が「否定によって定義」(MM317[201])されているからだ。「ひろがり」を延長と非延長とに、「緊張」を量と質とに、「イマージュ」を物質と表象とに分けるのはすべて悟性による恣意的な操作であって、持続的な様相に即応するものではなかった。

繰り返しになるが、直感的認識が一定の持続をともなっているとしているにも関わらず本来の持続の様相を無視して立論されるのは、「認識をおおいかくす記号的図式化」(MM323-324 [210])のせいであり、これによって実在は質と量とに二分されてしまう。伝統的の二元論はこの図式化の下にあり、物質の限りなく量的であるところの「質」を量としてこれに空間的区別を適用している。それゆえ、二元論の実在に対する誤謬は二重の原因を持っている。すなわち、対象の質・量は人為的でない存在論的な原因がまずあり、これへの非延長・延長の付与は人為的な記号的図式化に起因するとされるのだ。

私は本稿の冒頭で「近代的意識において知覚について考える場合、私たちは主体と客体を想定することに慣れていて」と述べたが、これに対してベルクソンは、対立する二項としてある空間的な区別を採用せず、時間的な区別をする。時間的な区別とは、潜在的な状態であ

るのか、それとも顕在的な状態であるのか、ということである。

持続的でない実在は存在しないから、持続的か否かではない。実在に沿って論議していくためには、対象が持続的な傾向をより強くもつか、より弱くもつかという区別になる。要するに、延長と非延長という二元論的対立の解消は、延長を“非”延長で規定しようとしたり、あるいはその逆で試みたりするのではなく、たとえば「ひろがり」がどのような過程を経て量的傾向をもつのか、あるいは質的な方向へ傾くのかということが吟味の中心となることによって解消されるべきだ、ということになる。

二項対立的な区別化は、行動を注視するときの、つまり顕在化している対象について分析し定義するときの区別である。このような区別は『物質と記憶』においても、純粹知覚論や純粹記憶論といった極限に持続を欠いた状態においてなされた。ただ、行動している持続は、それらがすでに持続をともなったものであり、記憶の潜在化と顕在化が複雑に混在している状態として考えることが重要である。『物質と記憶』では、瞬間的な、したがって純粹な知覚は身体の役割に当てられ、純粹な記憶は精神に帰せられる。ここから、認識とは知覚作用に記憶が介入して成立するものだ、とも読みうるのだが、直接感覚的な作用を「純粹知覚」とし、過去の記憶である「純粹記憶」が挿入されるというように単純化することは危険を伴う。¹³

なぜなら、一定の持続を占めない瞬間的現在などは存在しないにもかかわらず、想定できてしまったことと実在とを混同してしまい、時間性や運動性を欠いた物体があると考えてしまうことが問題だからだ。特に、心身問題に関しては、身体を空間的なものである・時間的なものでないとし、心を空間的なものでない・時間的なものであるとすると両者に「可能な推移はなく」(MM355 [247]) になってしまい、一元化など始めから不可能になってしまう。

「主観と客観、その区別と統一に関する問題は、空間よりもむしろ時間の関数として提起されなくてはならない」(MM218 [82]) とするベルクソンにおいては、たとえば精神は、姿形を持たないという意味で身体と対立させられるのではなく、現在という身体への「進行」として、不可分の運動としてみるということである。この、「時間の関数として」見る方法によって、心身関係は次のように説明される。「精神は(中略)記憶力、すなわち未来を目指しての過去と現在の統合であり、この物質の諸瞬間を集約して利用し、その身体との統一の存在理由である行動を通じてあらわれようとする点で、物質と区別される」(MM354 [246])、と。物質・知覚・身体・瞬間的現在は時間性の欠如ではなく、限りなく不動に近づいた運動であり、持続的で不可分な運動のリズムが緊張した状態として時間的に区別される。このように、一般的には「空間化」されて理解されてきた物質や記憶を、ベルクソンは持続をともなった状態の別として「時間化」し、区別し直す。その上で、程度の相違を容れられるようにして知覚を論じるという目論見があるのだ。

だから、まず問われるべきなのは心身をいかに統一するかではなく、いかに分離すべきなのかということである。私たちに与えられている表象は混然としていて、これを純粋な知覚と純粋な記憶という異常な純粋性へと分離することは困難な作業だ。運動もそうで、運動を運動体の位置として空間的に把握することは可能だが、運動体の持続的運動として時間的に把握することは難しい。だから、一方で他方を考えるとといった不当な、しかし習慣によって肯定されるような仕方ですら観察してしまう。

したがって、物質と記憶との本性の相違は対立的な実在の性質を示しているのではなく、全ての実在について顕在的に存在するか潜在的に存在するかを示している。さらに、日常的な知覚は、それらが常に運動し混然とした複雑な状態であることを『物質と記憶』は示している。

参考文献

- アンリ・ベルクソン『物質と記憶』ベルクソン全集2, 田島節夫訳, 白水社, 2001
 MM=Henri Bergson, Matière et Mémoire, Œuvres : Edition du centenaire, P.U.F., 1896
 ジル・ドゥルーズ『ベルクソンの哲学』宇波彰訳, 法政大学出版局, 1974
 B=Gilles Deleuze, La bergsonisme, P.U.F., 1966

注

- 1 ベルクソンの原著は全て Paris, Press Universitaires de France (P.U.F.) 版を使用した。また、邦訳は主として白水社全集版を使用した。
- 2 引用箇所は P.U.F. 版の該当箇所、[] 内は白水社全集版の該当頁数を示す。引用箇所は以下同様。
- 3 「あらゆる知覚はまったく思弁的な関心を持っている、それは純粋認識である」(MM179 [32])
- 4 単細胞生物のような下等動物に見られるように、「反応が直接的であればあるほど、知覚はたんなる接触到似てくるはずであり、知覚と反応の全課程は、この場合、機械的衝動に必然的運動が伴うのとほとんど区別されない。しかし反応がしだいに不確定になり、躊躇の余地を残すようになればなるほど、動物の利害に関わる物体の作用が感覚される距離もまたそれだけ増大する」。(MM182 [36])
- 5 「知覚は、権利においては、全体のイメージであるはずであり、事実においては、ただ利害関係にあるものに縮減されているのだから、説明すべきことは、知覚がいかにして生まれるかではなく、いかにして自己を限定するかということである。」(MM190 [46])
- 6 純粋知覚論で「ひろがり」に関わる箇所は MM181-183 [35-36]、純粋知覚に感情を回復させる MM206-212 [67-75]。
- 7 cf.B75-76
- 8 cf.MM224 [91], 225-226 [93], 228 [96]
- 9 「I——過去は異なった二つの形式のもとで残存する。(一)、運動機構において。(二)、独立的な記憶において。」(MM224 [91])
- 10 知覚の現在是不動の瞬間的現在の累積とは考えられず、常に進行(運動)しているものと考えなければならない。ならば、現在は常に記憶化されつづけなければならない。
- 11 MM278 [153] Imaginer n'est pas se souvenir.
- 12 cf.MM318-319 [203], 376 [274-275]
- 13 「純粋知覚」と「純粋記憶」の意味づけはきわめてユニークでこれらには「本性の相違」があると指摘されている。議論上、この「本性の相違 différence de nature」によって関係づけられたものは、物質と記憶、知覚と記憶、瞬間的現在と持続的過去である。前者はそれぞれ時間性が無視されたもの、逆に後者

は時間が本質として据えられているものとも考えられる。が、そうではない。本性の相違とは、ある対象について持続が緊張した状態であるのか、弛緩した状態であるか、という違いのことだ。つまり、時間で満たされているか、その欠如かといった有-無を基準とした、空間的ないし量的な区分ではなく、傾向の相違による区別である。(ドゥルーズによっては「潜在性」として説明される。) なお、「程度の差 *différence de degré*」は、比較の対象の時間的狀態が同一の場合に多用されている。たとえば純粹知覚論におけるイマージュについてだ。これは意識(選択)されたイマージュと意識(選択)されずにあるイマージュには程度の差しかないという議論だった。双方のイマージュは、緊張した状態(純粹知覚)でのイマージュであるという意味では相違がなかった。